
ゆうきの翼

yuzoku

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゆづきの翼

【Nコード】

N6269U

【作者名】

yuzoku

【あらすじ】

「バドミントンてなんかユルそうで楽しそうじゃね？」そんな浅くい理由でバド部に入部したユウキだが、訳あって「バドミントン同好会」から4人でスタート！？男女混合で仲良く(?)部活に励んでいきます。

バドミントンをやったことがない方でも読みやすいように、ユウキも初心者から始まって一から技などを覚えていきますので、ユウキと一緒にバドミントンの楽しさを知っていただけたらと思います。

५.

小学生と中学生のギャップ

「いまわたしの願い事が かなうならば翼がほしい」

ただ今小学校の卒業式の真っ最中。そしてみんなは「翼をください」を合唱中。いちおうオレも6割くらいの声の大きさを歌っている。歌っている途中で泣き始めている女子もいる。

「悲しみのない自由な空へ 翼はためかせ行きたい」

やっと終わった。卒業式も、オレの小学校生活も。でも何の感傷に浸る気分にもならない。

だってほとんどのやつはそのまま中学持ち上がりだもん。むしろ他の小学校からも来るらしいから楽しみはたくさんあるが。

いやそれ以上にオレには楽しみなことがある。

それはバドミントンだ。小学校の授業で何度かやったが楽しくってしょうがなかった。あのポンポンふわふわと、和気あいあい羽根つきし合っているのが心地よくていい。

中学の入学式を終えると、オレは期待で胸を膨らませて真っ先に体育館に向かった。

キュキュッ

ズバッ

そこではコートで選手が激しく動き、目にもとまらぬスピードでシヤトルが飛んでいた。

バドミントンでこんなに「ガチ」なスポーツだったのか。

今この瞬間、オレが思い描いていた『バドミントン』に対するイメージは180度変わった。

あまりのギャップにしばらく固まってしまった。だがオレはその衝撃の中に、新たな興奮を覚えているのであった。

まずは自己紹介

そういえばオレの名前を言ってなかったな。オレの名前は

「じゃあ一年生、一人ずつ名前とあとなにか一言あれば言ってくれ。その左端のキミから」

「は、はい。坂本湧希さかもとユウキです。12才です。」

「みんな入りたての一年生だから12才ってことは知ってるぞ。キャプテンらしき人がそう言うと、あたりで失笑が漏れた。」

しよっぱなからやってしまった。

そう、オレの名前は坂本湧希。『お遊びのバドミントン』改め、『ガチスポーツのバドミントン』に目覚めた少年だ。今はもちろん何の練習もしてないし、自分のラケットすら持ってないが。

今は正式に入部を決めた一年生が一人ずつ自己紹介をしている。何人かはもうセンパイ達と知り合いみたいでちよつとした会話もしている。ちなみにオレの仮入部期間はというと外からのぞいているだけで、他の人みたいに体育館に入っていく勇氣はなかった。それにしてもオレ以外は淡々と進んでるな。

「青木純弥あおきジュンヤっす！小学校ではジュニアで一年やってました。」

その瞬間センパイ達がざわめいた。詳しくは知らないが、どうやら『ジュニア』というのは『経験者』ということらしい。

「おお、即戦力として期待しちゃっていいのかな？」

「はい、もちろんっす！」

やたらと明るいヤツだという印象だけ残った。

「全員自己紹介終わったな。来週までになんでもいいから一本ラケットを持ってくるように。それと祐希。」

「はい！」

「間違つてテニスラケット買ってくるんじゃないぞ。」

「はい分かつてます。」

また失笑。今度はオレなんにもボケたこと言つてねえのに。

なんかさっきの「12才」発言で完全にイジられるターゲットにされたみたいだ。でも悪いセンパイ達じゃなさそうだから一先ずは安心だな。

東と西と蛍光灯

次の日から本格的に練習が始まった。

といっても1年はもっぱら屋外で体力づくりなわけだが。ちなみに純也はすでにセンパイに混じって別メニューである。くっそお〜。

学校の周りを10周も走らされた。一周あたり500mだから全部で5km!? そんなの小学校だとマラソン大会でもそんなに走らなかつたよ。正直5週目終わったあたりからもうへるへるで心が折れそうだった。これが毎日続くのかあ。

これで一日のメニューは終わりではなく、次は筋トレだった。腹筋、背筋、腕立て伏せにスクワットをそれぞれ30回3セット。さらにかかとを上げておろすときに地面すれすれに止める「かかと上げ」なる練習もやったがこれがまた地味にふくらはぎにくる。途中で何度か足がつっているメンバーがいた。そんな時はセンパイがすぐに足を伸ばしてくれた。

おれ達にいろいろと指導してくれているのは島村先輩だ。レギュラーには入れなかつたものの、おれ達の面倒を本当によく見てくれる。さっきの足を伸ばしてくれたのもこのセンパイだ。

そんな優しいセンパイに教えられても、練習は厳しいのでしばらくおれ達1年生は毎日筋肉痛に悩まされることになる。

そして次の週からいよいよラケットを持つての練習になった。ちなみにオレのラケットは1000円の半分おもちやみたいやつであ

る。ウチの母親曰く、「どうせあんた、すぐ傷つけるんだからそれぐらいで十分なのよ」だそうだ。
まあさっそくさつき嬉しくて振り回していると、地面に「ガスッ」とやったわけだから、かあちゃんの大正解だったか。

センパイを待っている間に1年の間でちよつとした輪ができていた。
「おおーすげー三島のラケットかけえ。一万くらいすんじゃね！？」

「まあな、やつぱりできる奴ってのは持つてるものからして良くないとダメなんだよね。」
三島か、そういえばそんなヤツいたな。なんか感じ悪そうだったからまだ話したことないけど。

「よし、じゃあ今日はラケットの握りから覚えようか。とりあえず握ってみて。」
島村先輩がそう言うと、みんな思い思いの握り方をしている。

「やつぱりかあ。たいていの初心者は今の君らのようにフライパンを握るようにラケットの面を横にして握っちゃうんだよね。」

「その握り方を『ウエスタングリップ』という。この握り方も試合で使わないわけじゃないがまずは別の握り方を覚えてもらおう。あつ、三島の握り方を見てごらん。」
どや顔の三島のラケットの方を見てもたしかにおれ達とは握り方が違うようだ。

「これが『イースタングリップ』だ。これがバドミントンにおいて基本となる握り方だ。握手の要領で、薬指と小指でしっかり押さえ、後の指はラケットコントロールしやすいように軽く握る。はいやってみて。」

「はい、みんなできてきたみたいだから次はそれで素振りをしてみよう。」

言われてもないのに三島が素振りを始めた。

「三島、全然体のひねりがなくて手だけで振ってるぞ。」
とんだ赤っ恥だ。言っちゃ悪いがおもしろかった。

「いいか、よく見とけよ。」

シュツ

肩口から振り上げられたラケットはきれいな弧を描いて振り下ろされる。

かつけえー

「これがバドミントンでは基本となる『オーバーヘッドストローク』の素振りだ。オレだけじゃなくて他のセンパイのスイングも見て参考にしなげらやるといいぞ。あと、自分のスイングを鏡で見て確認したり誰かにアドバイスをもらったりするのも上達のコツだからな。」
「はい！」

オレも早くああいうスイングをしたくてラケットを振りまくった。でも部屋でもラケットを持ったまま素振りをしていたので蛍光灯を割ってしまい、母親に大目玉をくらってしまったのは失敗だった。

突然の家族内重大発表

「フアイトー」

「ナイスー」

バドミントンの応援の時はだいたいこんな感じでやるらしい。ちなみに味方がミスしたら「ドンマ〜イ」だ。

おれの必死の応援のおかげ、ではなくセンパイ達と純也の活躍のおかげで我が部は県のベスト8にまで入った。

しかしこれは3年生にとつては最後の試合。いくらいい成績を残しても負ければその時点で引退なのだ。ちょっと複雑な心境だった。

でもこれでオレも体育館の中で練習ができるぜ！と浮かれまくっていた。

そんな矢先のこと。夜とぅちゃんから大事な話があると言われ、リビングに正座させられた。

まさかこの前の蛍光灯のことか？「あれ高かったんだからしばらくおまえのお小遣いなし」とかかか？勘弁してくれよ〜なんて思っていると急にとぅちゃんが口を開いた。

「ごめんユウキ、来週からお引越した。」

え

しばらく言葉が出なかった。

「父さんの急な転勤で決まったことなんだ。悪いが隣町に引っ越すことになった。」

「まじかよ、せっかく中学でも新しい友達出来たのに。それに部活だってこれから楽しくなってくるとこだったのに。」

「本当にすまん。でも新しい学校でがんばってくれ。」

もう「大人の事情」で決まっちゃってるみたいだししょうがないか。それにバドミントンは体育館があればドコだってできるしな。新しい学校でがんばろっと。

まずは会長探し

オレの新天地は「白羽中学」か、まさにバドミントンをやるための学校って感じだな。

まずはクラスで自己紹介だ。

「坂本湧希さかもとユウキと言います。趣味はマンガ読むことです。部活はバドミントン部に入りたいと思っています！」

自己紹介が終わると若干クラスがざわついた。

なんだ？特に変なこと言ったつもりなかったが。もしかしてマンガ好きって先生の前で堂々と言っちゃうとまずいような、マジメな雰囲気まじめなきの学校なのか？

しかし休み時間になると何人かのクラスメイトが話しかけてくれて、転校初日ですでにだいぶ馴染めた感じだった。

放課後、仲良くなった友達の一人、中山信弥なかやまシンヤに聞いてみた。

「なあ、バドミントン部ってどこの体育館で活動してるんだ？」

すると、くすつと笑ってから信弥は答えた。

「残念だけどこの学校にバド部はねえよ。」

「ええ〜！？」

そうか、それで自己紹介の時若干変な空気になってたのか。

「まじかよ、じゃあオレどうすればいいんだ？」

「そういえば同好会でやってるってのは聞いたことあるな。」
「それってどこでやってんの？」
今のオレはもうそれにすぎるしかない。

「たしか校庭の隅で羽根つきしてるのみたことあるぞ。」
「羽根つき」って。こいつ完全にバドミントンをばかにしてるな！
でもとりあえずその情報には感謝してその場所に向かうことにした。

ポーン、ポーン

なにやらオレが小学校の時思ってたのと同じ、のほほんとした音が響いていた。

女の子二人が楽しそうに打ち合っている。
アイツが言ってた「羽根つき」ってのはあながち間違いじゃないかもしれない。

「あの〜、バドミントン同好会の人たちですか？」
「そうですよ。」

「あつ、もしかして入部、じゃない入会希望者ですか？」
「いちおうバドミントン部に入りたくて来たんですけど、」
「待ってました、アタシはバドミントン同好会会長、菅原香織すがわらかおりよ、よろしくね。」

「アタシは副会長の本庄佑梨ほんじゆうりよ。」
「2人ともよろしくです。あの、いつもこんな感じの練習なんですか？」
「なにせ人数足りなくて部活じゃないから、コートがなくなってるね。」

しかも教えてくれるセンパイも先生もいないし。」

「あつ、でもキミが入ってくれるならなんとかなるかも。」

「3人で部活として申請できるんですか。」

「ううん、4人だよ。でも前にキミと同じようにバドミントン部に
入部希望してた男の子いたからその子入れればいけるかも！」

「え、まじですか？」

ここでオレのダダ下がりだったテンションはようやく上がってきた。

「キミへの最初の指令はその男の子を連れてくること！」

「え、おれ〜？」

オレの白羽中学でのバドミントン生活は入部早々、いや入会早々前
途多難な幕開けとなった。

4人目探し

次の日さっそく4人目の部員となるであろう人を勧誘に向かうことにした。

しかし与えられた情報はクラスと名前だけ。っていうか転校生にこれはハードル高すぎだろ！

とりあえず昼休みに会いに行くことにした。

「あの〜かみやコウイチ神谷晃一くんていますか？」

「ああいるよ、コウイチ〜なんか呼ばれてるぞ〜。」

「おう」

返事をした彼はさらりと伸ばした髪がところどころハネていて、シッコツとした顔立ちだ。

「なんすかあ？」

「あの昨日バドミントン同好会の女の子に聞いたんだけど、前にバドミントン部に入ろうとしたんだって？」

「そうだよ、でも部じゃないから体育館使えないって言われて同好会の方は断った。」

まあそれが普通だよな。

「オレ実は昨日転校してきたばっかでバド部作ろうと思ってるんだよね。神谷くん入ってくれたら部として認められるし一緒にやらない？」

「まじで！？きたー！ありがとう。それなら喜んで一緒に部活やらしてもらおうよ！よろしくな、え〜っ」と

「坂本湧希、ユウキでいいよ。」

「そっかじゃオレのこともコウイチって呼んでくれ。よろしくな湧希。」

なんかアツという間に話がまとまった。

とにもかくにも、これでようやく部員（候補）がそろった。

放課後、晃一を引き連れて香織たちのもとへ向かった。

「ナイスよ、湧希くん！あとは顧問を見つければカンペキね！」

その問題が残ってたのかあ〜！

産休でサンキュー（前書き）

はいそこ、タイトル見ておやじギャグとか言わない！

産休でサンキュー

その日さっそく4人で部活申請をしに、職員室へ行った。

「でもあなた達、顧問の先生がいらないんじゃないよ。」
教頭先生に当然のことを言われた。

「誰かやっていただけそうな先生いらっしやらないんですか?」

「そうはいつでも6月なんて中途半端な時期からじゃねえ。普通の先生方はすでに他の部活の顧問をやってらっしやるし。」

「それなら私がやります!」

そう、元気に答えたのは若い女の先生だった。

「でも先生は産休明けたばかりじゃない。だいじょうぶなの?」

「問題ナッシングです。体力には自信ありますから。」

「あ〜私たちみんなほとんどバドの動き習ったことないんですけど...」

「その点はまっかせなさい!ちょうど私バドミントン経験者だしバッチリよ!」

「それじゃやってもらいましょうかね。」

「やったー!」

「それじゃこれからよろしくね、バドミントン部顧問の有馬清美よ。」
あじま せいみ

ワタシが顧問になったからにはビシバシ鍛えるから覚悟しといてよ
ね！」

「はい！」

スパルタは望むところだぜ！

美人の皮を被った悪魔

今日から始まったバド部の練習は初日だとは思えないほどハードなものだった。

ランニング「7キロ」って前いた部活より増えていますけど！？
女子も混ざっているが容赦なしだった。

他にも『ステップ』というバドミントン独特の動きを延々とやらされた。足をクロスさせながら横方向に走る『クロスオーバーステップ』や股関節を鍛えるために『モモあげ』という練習もやった。けっこうやって恥ずかしい動きも多く、他の部活も見ている中だったためかなり恥ずかしかった。

そして最後はひたすら素振り1000回だった。

全部のメニューが終わると（というかすでに途中から）みんなへ口へ口だった。

「とりあえず正式に部として認められるまでは今日みたいな練習が続くからよろしくね。」

「は、はい……」

4人とも、昨日顧問が決定した瞬間とは比べ物にならないほど気のない返事だった。

「悪魔だ〜〜！」

次の日信弥に練習のことをぼやいていた。

「なんでだよ、有馬先生で美人だし。ちょ〜うらやましいぜ。オレもバド部はいろっかな〜」

「んなアホな理由じゃ一日だってもたねえよ。まあオレもまだ一日目だけとすでに死にそうだあ。」

「そんな厳しいのかよ。でもま、念願のバド部ができたんだしがんばれよ？」

「わあつてるよ！ここでやめたら、あの鬼コーチに負けた気がして悔しいからな！大体あの程度のし〜きじゃオレのバドへの気持ちはとめらんねえよ。」

「ふう〜かつこいい〜」

この日の放課後の練習で再び心を折られそうになったオレだった。

マックで一悶着

バド部としてスタートして2週間がたち、明日はようやくコート練習ができるということとで今日は軽め(と言ってもかなり内容の濃い1時間だった)にこなして練習は終わった。

終わった時間が早かったので、おれ達は親睦会も兼ねて4人でマックに行くことにした。

席の関係で佑梨と晃一、香織とオレで分かれて座ることになった。ちなみにこの席割は佑梨が仕切つて決めた。

「せっかくだし晃一くんと話してみたいな」だそうである。

必然的に残った二人。

「いやこの2週間きつかったね」

「でも明日でようやくコートが使えるんだぜ。やっとシャトルが打てるよ。」

「ホントだよ。あたし達自分で同好会で練習やってた時は軽い打ち合いくらいならしてたけど、それすらやらせてもらえなかったからね。」

「それにしてもすごいよな、お前ら。オレは前の学校である程度体力は鍛えられてたけど、おまえらも一緒にあの練習についてこれたんだから。」

「言つときますけどランニングだけは毎日やってたんだからね! 3キロだったけど。」

「なるほどね、いちおう上手くなるつもりはあったわけか。」

「なによその言い方! まるで私たちがお遊びでやってたみたいじゃ

ない！」

「いや最初にお前らの打ち合い見てたらどう考えてもお遊びだったぞ？」

「失礼ね！そんなに偉そうに言うんだったらさぞかし自分はうまいんでしょうね？」

「うぐっ」

そう言われると何も言えなかった。前の学校では1年はせいぜい素振りまでしか習っていなかったからだ。

「ほら見なさい。あんたもどうせ似たようなもんじゃないの。」

「うるせえな、これからバンバンうまくなってお前らなんか置いてつてやるよ。」

「言つときますけどわたしも男子には負ける気ありませんからね！」

「まあまあ2人とも落ち着いて。席変わるつか？」

ここで晃一が声をかけてきた。

「ちようどよかったわ、コイツと話すのそろそろうんざりしてきたの。佑梨いっそっち行くねえ」

「オマエ女子に向かってあの態度はないぞ？」

「だってあいつが悪いんだもん。」

「はいはいわかった、わかった。じゃ、男二人で（ジュース）飲み直しますか！」

その後は男同士のしょうもない、でもとっても楽しい話で盛り上がった。まあそれ以上にあっちの女子二人は騒がしかったが。

コートの中も地獄

「はい、じゃあ今日は体育館の中でやるから気合い入れてね！」
「はい！」

みんなようやくシャトルが打てると思ってウキウキだった。

「早くスマツシュ打ちてえ〜」

「オレもオレも！」

「あたしはドロップショットやってみたかったのよねえ。せつかくネットもあるし。」

4人とも進んでネットを張る。

「よし、準備できたわね。まずワタシの動きをよく見とくのよ。」

そついうと有馬先生は前後に激しく移動し、前でラケットを突き出す動作を一回、後ろに下がって今まで散々やらされたオーバーヘッドの素振りを一回というのを30秒ほど繰り返していた。

「まずはこれをやりましょ。」

「え、待ってください先生。せつかくコートあるんだしシャトル打ちましょうよ。」

「甘い！……！」

一喝だった。

「キミらがシャトル打つなんて10年早いわ！まずは基本となる『フットワーク』を身に付けること。足の動きは『ステップ』で練習したことを思い出して。後ろに下がった時の素振りは今まで何回も振ってきたことを動きながらやってみるのよ。前は『ヘアピン』と言って軽く落とすときに使うストロークよ。」

「は、はい」

「声が小さい！」

「はい！」

その日一日はフットワークの動きを覚えることとその実践で練習は終わった。

みんな練習が終わる頃には外の練習以上にくたくたになっていた。

部員は4人しかいないのでコートが使い放題なのは完全に裏目になったと言わざるを得ない。

ようやく念願の

急造のバドミントン部はまだあまりコートを使える日が少なく、週3日は外で基礎体力作り、残り2日だけが体育館、だった。その2日もフットワーク地獄にあてられるのだからたまったもんじゃない。

部ができて一か月後。いつものように練習メニューを終えた後、有馬先生がこう言った。

「今日はシャトルを使った練習をするよ」

「やったー!!!」

もう4人とも練習の疲れを忘れて大はしゃぎである。男同士、女同士で抱き合ってさえ喜びを表現していた。

「無邪気でいいねえ、中学生は。見てておもしろいわ。」
この際なにを言われようとも気にすまい。とにかくこれでようやくシャトルが打てるんだ!

「でも先生、今日は体育館使えない日ですよ？」
一番最初に冷静に戻った香織が聞いた。

「外でもちゃんと練習できるのがあるのよ。」

そうやって一瞬ためる。

「もう、じらさないでよセンセイ。」

「ワルイワルイ。まず最初に覚えてもらうのは『ドライブ』という

ストロークよ。ちなみに『ストローク』っていうのは球の打ち方の種類ってところかしら。」

ラケットを前にかまえてイースタングリップの握りで打ち返すのよ。高さはネットを意識してね。キミくらい身の身長だと大体相手の頭のとっぺんを狙うといいかもね。

始めはもうぐっただぐだった。今日に限って風が強いのである。それを先生に言うと、

「風の流れを読むのよ」

とか訳のわからないアドバイスをされた。本来は室内競技だし、たぶん試合ではまったくいらぬスキルだろう。でもやっていくうちにお互い打ち返せるようになりラリーになり始めていた。

とにかく久しぶりにシャトルを打てたこと自体が楽しくってしょうがなかった。

スポーツチガウヨ

「今日はいよいよ体育館で打ち合いをします！」

「いやっほーい！」

歡喜の舞パート2 .

「コラ、そんな元気ありあまつてるんだったら、まだフットワーク続けるぞ？」

「すいませんでした！」

こういうところは4人とも息ぴったりであった。

「まずは『クリア』を打ってもらおう。湧希、向こうのコートからサ
ービスショット打ってみて。」

「はい！」

ガスッ

ラケットのふちに当たってイヤな音がした。

その後も何度かやったがきれいに高くまで飛ばなかった。

「しょうがないわね。晁一代わりにやってみて」

「はい！」

ポーン

先生のいる相手コートの高い位置まで高く飛んでいく。

パシッ

それを先生は晃一がいるコートの、ちょうど後ろ側のラインぎりぎりまで返した。

「おおー！」

「いちいちこれくらいでリアクションしないの！ さ、じゃあみんなもやってみて。」

みんなは先生みたいにきれいに飛ぶはずもなく、お互いコートの中を右往左往しながらなんとか相手コートに返すのが精いっぱいだった。

「これで己の未熟さを実感できたみたいね。」
しばらくすると先生がこういった。

「じゃあいったんへボへボクリアの打ち合いはやめにして集合！」
何気に先生言葉でもキツイな。

「ワタシがサーブショットを打つから今度はそれを打ち返すんじゃないくて左手を伸ばしてキャッチしてみてください。これで打つ時のシャトルとの距離感をつかんでもらうわ。あ、サウスポーの晃一は右手でね。」

「はいー！」

佑梨の番だ。始めの一発目はこわくてよけていた。

「こら、よけるんじゃない！」

先生はこういう時は容赦ない。

「まったく、これだから女子はっ」

そう言っただけは自信満々にコートに立つ

コッソ

頭にクリティカルヒットだった。

これにはみんな失笑だった。

先生も笑いをこらえながら

「今度はきちんと手でとるように」と言われた。

ちくしょー、今度は絶対とってやる!!

その日オレはあと3回へディングを決めることになる。

イロイロ楽しい

それからというものの、体育館が使える日はシャトルの打ち合いをさせてもらえるようになった。もちろんフットワークメニューをこなした後ではあるが。

それからは一通りのストロークを習った。

まずは『ドロップ』。オーバーヘッドストロークで軽く打ち、ネット際に沈める。それをまた相手のコート後方に打ち返すのが『ロブ』だ。これは基本的にアンダーヘッドストロークになる。この二つはペアで延々と一方的に打つ練習をした。

『ヘアピン』といって、ネット際でシャトルを落とし合うのは佐梨が一番うまかった。

『ドライブ』も屋外だけでなく、コート内でも練習するようになった。反射神経がいいのか、シャトルを前の方でとらえて攻めるのがうまいのが香織だった。

そしてお待ちかねの『スマッシュ』。オーバーヘッドでもいつきり相手コートに叩き付ける（オレのイメージ）ストロークだ。

「晃一い、コースイイね〜」

「あざすす！」

「湧希、速いのはいいけどもつと低く打ちな！ そんなんじゃ『レシーブ』でカウンターくらうよ。」

「はい！」

とまあこんな感じだ。

これで最近はやうやく楽しくなってきた。

あの地獄の練習が始まるまでは……

地獄の千本ナンチャラ

ついに始まってしまった。

『ノック』という名の地獄の練習が。

シャトルを打てるから一見楽しそうに思えるがそんなことは決してない。

「よし、いくよ」

パーン

パーン

パーン

パーン

有馬先生のトスはきれいにコートに4隅を狙って落ちる。

ノックを受ける人は容赦なくコートの前左右にふられる。

ここでまたしても少数部員の弊害だ。自分の番が回ってくるのがとにかく早い。

ストローク練習の時は悠々と打てたはずの広いコートが恨めしく思えてくる。

練習後のこと。

「あゝ疲れた。有馬先生きつすぎだつっつもの！」

「先生産休明けなのに、はりきりすぎじゃない？だいじょうぶかな。」

「香織は優しいね。こんな時に他人の、しかもオレ達をしごいてる張本人を心配できるなんて。」

「ちよつと湧希、なによその言い方。感じ悪い。」

「まあまあ二人とも落ち着けて。疲れてイライラしてるんだろ。晃一が割って入るがもう関係ない。」

「そうかな。オレは前からコイツのいい子ぶりっこがイヤだったんだ。」

「こつちこそ口が悪いだけの下手くそなんかうんざりですう。」
「なんだってえ！このブス！」

オレがそう言った瞬間、香織は走って出て行ってしまった。その目にはうっすら涙が光っていたような気がする。

その日はそれから誰も話すことなく帰った。

特別な焼き肉

その次の日から香織とオレは一言もしゃべらない日が三日ほど続いた。

いつものようにノックをしていると急に手を止めた。

「なにになに？最近みんな元気ないなあ。どうしたの？」

「実は、ノックを初めて受けた日から湧希と香織がケンカしてるんです。」

そう言っつて佑梨がこの前のことを話し出した。佑梨のやつ余計なこと言いやがって！

「なんだそういうことか。じゃあ今日の練習は終わり！」

「えっ、せつかくコート使える日なのにもつたいたいじゃないですか！」

オレは半ばやけくそで抗議する。

「こんなんで練習してもなんも身につかないよ。それにね、バドミントンよりもっと大事なこともあるんだからね。話を聞いてる分には湧希が最初にケンカ売るようなこと言っただけで、それに香織も本気で怒っちゃったみたいね。」

2人とも力なくうなづいた。

「2人とも反省してる？」

「…はい。」

「じゃあ仲直りの握手だ。」

「ごめんな、香織はただ先生を氣遣って言ってたのに。それにブスとかひどいこと言ってるゴメン。」

「あたしの方こそ下手くそとか悪口言ってるごめん。」

「なんだかすっごくうれくさかったけど、今まであった胸のつつかえが取れた気がした。」

「さあ仲直りしたところで今日はみんなで焼き肉でも行きますか。」
「え、いいんですか？」

「だいじょうぶ、先生節約家だからお金は持ってるよ。」

「じゃあ練習は？」

「さっき言ったでしょ、今日はお・わ・り。元はといえばワタシの練習がきつすぎたってのもあるからね。今日はパーッと騒ぎましょうや！」

「やったー！」

「もう、湧希はゲンキンだな。」

「ま、そこが唯一のいいところだしね。」

「おい香織、今なんて言った!？」

「コラ、言ったそばからケンカしないの!」

その日の焼き肉は格別においしかった。

ボンボン練習

今日は外練の日。いつものようにキソ練を終えると有馬先生が言った。

「今日は運動会のための準備をしてもらいます！」

みんな頭に？マークが浮かんでいる。

「うちの学校には部活対抗リレーがあるのよ。それに我がバドミントン部も出場することになったわ！」

「え、他の部活の2年生とかに交じって走るんですか？」

「絶対ビリだよ〜」

「これ以上ランニング増やすのは勘弁してください〜」

「ちょっとアンタ達勘違いしてるみたいね。部活対抗リレーではその部活の特色を活かした走り方をするのよ。ウチでいったらラケットの上で羽根つきをしながら走ることになるわね。その練習をしようと言ってるのよ。」

「なんだよかった、ガチレースのために走りこめとか言われるのかと思っただあ〜」

「ホントホント」

「もちろんいつもの練習はしっかりやった上でよ。なんかムカついてきたからランニングの距離増やそうかしら？」

「すいませんでした！」

「でも先生、そんな運動会のためにがんばって意味あるんですか？」

「これは何も運動会で目立ちたいからってやるんじゃないのよ。この練習を通してヘアピンなんかのシャトルの感覚を身に付けてほし

いと思っているの。それに運動会っていう目標があった方がやりやすいでしょ?。」

「なるほど、先生あつたまいい。」

「こら佑梨ちゃかさないの。」

そう言いつつ先生はにやけが止まらないらしい。

「全校生徒の前で恥かけないもんな、死ぬ気で練習しないと。」

「分かっているじゃないの晃一。さっ、わかつたらとっと練習始め！」

これが意外と難しく、最初はラケットのフレームに当たってガスガスイっていた。

だがしばらくすると、ポンポンと軽快な音が鳴り響くようになっていた。

あれ、オレ天才じゃね?とか調子にノッテると、

「ミナだいぶ上達したみたいね。今度はそれを走りながらやってみよ。」

そうだった。

運動会前日まで外練の日はこのポンポン練習の悪戦苦闘は続いた。

走ってつないでばばばーん

運動会当日を迎えた。

当然部活対抗リレーだけじゃなく、他の競技にも出演しなければならぬ。

まずは個人競技だ。

オレは1000m走に出場する。

「よーい、ドン！」

よし、スタートは成功した。

しかし隣から猛烈な勢いで野球部のやつに抜かされた。

結果6人中2位だった。くっそ、短距離はけっこう自信があっただけに悔しい。

次は障害物競争だ。晃一はひよいひよいと潜り抜け1位になった。

続いて女子の障害物競争が行われ、同じく器用にくぐりぬけて佐梨が1位となった。

さらに借り物競争では要領のいい香織も1位をとってしまった。

気づいたらオレだけ1位じゃない？で、でもま、香織とかなんて運

の要素もあるし、き、気にしないでおう。

フォークダンスやらのちゃんちゃらおかしい競技をちゃっっちゃと終わらせた後、おれ達にとってはメインの部活対抗リレーがやってきた。

「よーい、スタート！」

先頭は晃一だ。ポンポンとリズムよくついている。練習の成果が出ているみたいだ。

（剣道部は防具フル装備で面や胴をひたすら繰り返すというパフォーマンスらしい。ご苦労なこつた。）

続いてそのシャトルを香織が受けとる。一回一回の感覚が大きく、ぐいぐい進んでいく。

（サッカー部はリフティングで進んでいる。あつ、ボールが客席の方に飛んで行った。）

続いてはオレの番だ。落としてもすぐ拾ってスピードの力任せで佑梨につないだ。

（野球部はバトン（球）を渡すときに相手になげて受け取る側が一度バットでフライを上げてからキャッチをするという器用なことをやっている。ちなみにさつき100m走でオレを抜かした奴は空振りしていた。残念でしたあ。）

佑梨はスピードこそないが一番安定している。練習でも結果的に一

番速かったのだった。

みんなでないだ結果、見事1位をとったのであった。部活ことで
元々条件が違う？そんなのはキニシナイ、1位は1位だ、うん。

実は前から気になってたんだよね

運動会が終わった後は、部活はまた前に戻ったようなメニューをひたすら繰り返す毎日。

途中テストなんかもあったが気づくと夏休みに入っていた。

そんな夏の日の一コマ。

「今から試合やるよ！」

「え、ちょっと待ってください。そんな急に言われても心の準備が…」

「っていつか相手はドコの学校ですか？特に見当たりませんが、」

「心配しなくても大丈夫！試合相手はアンタ達よ！つまり部内でシングルズ総当たり戦を行うわ！」

「ええ〜！！！！！」

ってなわけで始まった『総当たり戦』。

さつきは驚いたものの、なにげにお互いの実力が気になってもいたのだ。

まずは晃一とからだった。

「ら、ラブオールプレー」

香織、審判が緊張してかむんじゃねえよ。

ポーン

この頃になると相手のコート奥まで飛ばせるようになったオレのサブから、ゲームは始まった。

9 - 15で負けた。

その後は香織とだった。絶対負けたくない！

その気持ちが通じたのか競った拳句15 - 13で勝った。

最後に佑梨には負けてしまった。

終わってみれば晃一だけが3連勝して、残りの3人が仲良く1勝2敗という結果に終わった。

ノック、ノック、ノック

晃一に負けた。っていうか何気に佑梨にも負けた。そんなどうしようもない悔しさからオレのバドミントンへの練習熱はいっそう高まった。

ちなみに部内全勝した晃一はその後、有馬先生への挑戦権(?)を手に入れ、見るも無残にボロ負けした。

そんなわけで4人そろって敗北を糧に、夏休みの練習に励んでいる。

「おらあいくよ、それっ、それっ！」

自分のサディスティックさに酔う有馬先生の声と、容赦ないノックの音が響く。

今は先生がネットより上の位置でシャトルを打ち、それを左右に振られながら必死に打ち返すというものだった。

シャトルを打つたびに体制を低くしなければならぬのでこれはかなりしんどいものだった。

ようやく休憩に入った。

「はあくもう有馬先生の鬼い〜！」

「ちよつと湧希、丸聞こえだよ！」

「すいません！」

「まったく湧希はバカだなあそういうことはもっとコソコソ言えよな。」

「コウイチクン、それも聞こえてるぞお、陰口いう元気あるならもう1セットやるうかあ〜？」

「すみませんでした！」

女子二人は賢いもので黙ったままだ。

「はい休憩終わりっ！次、前後ノック。
またノックかよ〜」

いちおう『学習』しているので心の中でぼやいてみる。

これは日頃フットワークで散々やらされている前後の動きだ。前に落とされたらロブで返し、後ろに下がったときはクリアで返す。しかも毎回どちらに来るかわからないので必ず中間地点でいったんステップして止まらなければならない。ひたすらこれの繰り返し。

もうなんなんだよ、足追いつかねえよ。

「コラア湧希、足が止まってんだったら鍛えられてない証拠だね。外走ってきな！」

そうしてオレたちの夏休みは過ぎていくのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6269u/>

ゆうきの翼

2011年10月8日13時54分発行